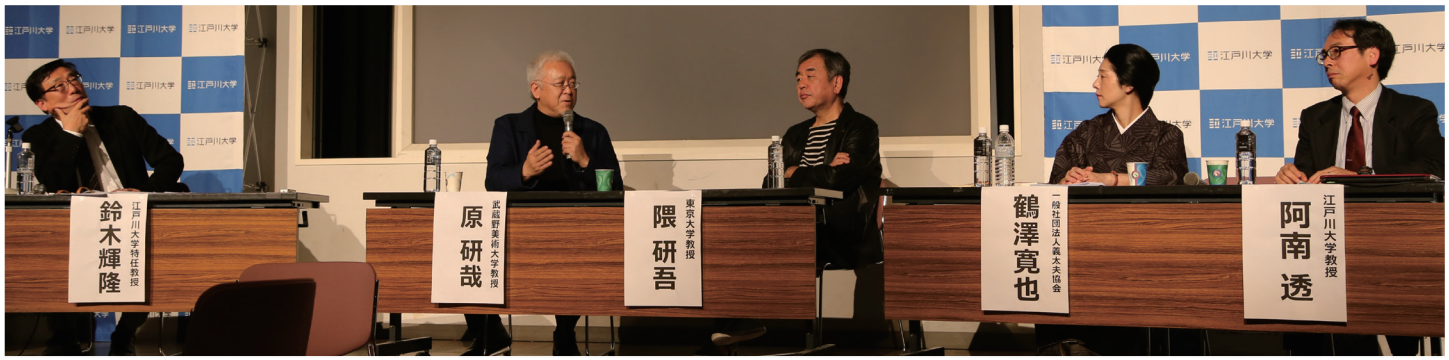
江戸川大学学生新聞
THE EDOGAWA TIMES
VOL.6 #21
2016年12月28日（水）
取材／編集：学生記者クラブ
発行：江戸川大学企画総務課

日本観光研究学会 2016 年度全国大会シンポジウム開催

日本の美意識は観光資源

12月3日に江戸川大学のメモリアルホールで日本観光研究学会 2016 年度全国大会シンポジウムが開催された。建築家の隈研吾さんとデザイナーの原研哉さんによる基調講演の後に、女流義太夫三味線奏者の鶴澤寛也さんと江戸川大学現代社会学科長阿南透教授、同大学鈴木輝隆特任教授を加えたパネルディスカッションが開かれた。（撮影・文：石井 蓮 ）



鈴木輝隆（すずき　てるたか）。江戸川大学特任教授。資源家として、地域とクリエイターを結び、地方の自立に貢献する。通称「ミツバチ先生」。

原研哉（はら　けんや）。武蔵野美術大学教授。株式会社日本デザインセンター代表。無印良品アートディレクションなど活動範囲は多岐。世界的に活躍。

隈研吾（くま　けんご）。東京大学教授。隈研吾建築都市設計事務所主宰。「新国立競技場」や「新歌舞伎座」などを手がける日本を代表する建築家。

鶴澤寛也（つるざわかんや）。女流義太夫三味線奏者。一般社団法人義太夫協会、義太夫節保存協会会員。京都造形芸術大学非常勤講師も務める。

阿南透（あなみ　とおる）。江戸川大学教授・現代社会学科長。日本の伝統的な祭りである「ねぶた」を文化、観光、芸術と多方面から研究。

シンポジウムのテーマは「日本人の美意識は観光資源」。わかりやすく言えば、観光資源として世界に向けて日本の良さを出し切れているのか、もっと日本の良さを生かす方法があるのではないかといった問題提起だ。伝統芸能・行事といった文化的な観点から鶴澤さんと阿南教授が、またデザインの観点から原さんが、建築の観点から隈さんが、プレゼンテーションをし、さらに討論が行われた。

初めに伝統芸能の「義太夫節」を知るために、鶴澤さんの三味線の演奏が行われた。義太夫節は竹本義太夫が創作したことからその名がついた浄瑠璃（節をつけてストーリーを語る伝統的なエンタテインメント）の一流派。人形劇の人形浄瑠璃とともに発展してきた。本来は語りとセットだが今回は三味線だけの演奏だった。棹が太く全体的に大きい太棹三味線は3本の弦だけで深く重みのある音色をだし物語の情景を表現する。演奏が始まると独特の音色と空気感に、会場にいる全員が真剣に聞き入っていた。

演奏後、鶴澤さんは「村おこし町おこしとして、廃れていた伝統文化が復活している。これは貴重な観光資源」と話した。

次に、長年ねぶたを研究し、現在ねぶた大賞の審査員でもある阿南教授が、国内だけはなく海外でも披露され好評なねぶたの歴史や製作過程、現在の傾向などを説明した。

日本の美意識を世界で生かすための課題とは

ディスカッションでは、「伝統を自分の作品の中でどう考えるか」がまず話題となった。

原さんは直前に聞いた鶴澤さんの三味線や大倉流の鼓などから感じるリズム、間を壊す感覚が「デザインの時も文字をあえて予定の所からちょっとずらして置いて見たりする」自分のデザイン感覚に似ていると発言。「そういう絶妙なところで、伝統と繋がっている」と感じるそうだ。また原さんは「動きの中にある美意識」も指摘した。

隈さんは「畳の感覚やにおい。教養とかではないところで、身体的な感覚は役に立っている」という。

最後は、世界中で仕事をする隈さんの目線から見た、日本の問題点について話し合われた。

例に挙がったのがエルメスのブランド「shang xia(上下)」だった。このブランドは職人の技術とエルメスのデザイナーのタッグで商品を作っている。隈さんがそのパリ店と上海店の建築に携わったときに、実はこのブランドは日本でやろうと思っていたという話を聞いたそうだ。ところが、日本の竹細工などの職人に声をかけると、所属の協会や市に話を通してくれと言われてしまう。そのため、同じような技術があり、個人で受けてくれる中国に移ってしまったという。「日本はいいものを持っているのに。一人で行かないで、みんなでってところがマイナスになっている」と隈さん。

それに対して鶴澤さんは「師弟関係はただの上司と部下とは違って、人間的に深く食い込んでいるもの。やったことがないことに関しては、師匠に無断でできないから聞いてほしいっていう感覚は分かる。ただそこに隠れてしまうという悪い点もあるかもしれない」と伝統芸能を生業とする者ならではの意見がでた。

今回のコーディネーターを務めた鈴木先生は、「観光資源として押し出すために、世界に日本の美意識をどうやって表現していくか話し合ってきたが、必要な隠れた美意識への視点や編集方法、表現について学べたと思う」とまとめた。